



@幸せな贈り物



名節が 大切な理由

人間らしさ 旧正月の時期がくれば、名節（韓国固有の盆・正月）症候群とか、名節離婚とか、うれしくないニュースが聞こえてきますが、それでも、旧正月や盆は家系が一つであることを確認して、その幸せを分かちあうまことの親孝行の機会であり、祝福の機会です。

何の努力もなく手に入れることができるのが「年齢」だと言われています。

すでに人に対する懐かしさを感じるのを見ると、私自身も年をとったという気がしますが、老いていくというよりは、熟していく人間の成熟を味わいたい心があります。

人に対する懐かしさは、他の見方をすれば、人間の真実の姿でないでしょうか。

本来の人間は一人である存在ではなかったと聖書は話しています。

創造主とともにいた人間、私の肉の中の肉、骨の中の骨と告白しながら家庭を作った人間。ひとりではできないことを知っておられ、神様は人間を創造して、家庭から造られたのかもしれませんが。

ところで、いつからか家庭が崩れて、夫婦関係が急速に壊れ始めました。最近、現代人を訪れているいちばん大きい病気が「孤独とさびしさ」だと言われています。

それで血縁が結んだ人間らしさのために、名節にそれほど多くの人が故郷を訪れるのではないかと思います。その人らしさをともに分かち合う本来の人間に対する素朴な懐かしさを、聖書でもこのように表現しています。

「ふたりはひとりよりもまさっている。ふたりが労苦すれば、良い報いがあるからだ。どちらかが倒れるとき、ひとりがその仲間を起こす。倒れても起こす者のいないひとりぼっちの人はかわいそうだ。また、ふたりがいっしょに寝ると暖かいが、ひとりでは、どうして暖かくなるう。もしひとりなら、打ち負かされても、ふたりなら立ち向かえる。三つ燃りの糸は簡単には切れない。」伝道者の書 4:9~12

すべての人が名節になれば、もう一度思い出してみる単語があります。

それは「まことの親孝行」です。そして、このまことの親孝行を実践する機会が、名節です。そのまことの親孝行のはじまりは、互いにともにいて、お互いの幸せを分けちあうところから始まります。聖書は、まことの親孝行をしようとするなら、3つのことをそろえなければならないと言います。

最初に、子どもが成功することです。(詩 127:1~7) 子どもの成功は親の喜びで、誇りになります。二つ目、イエス様にあって親に従順するのが、地上でうまくいって長生きする親孝行の奥義です。(エペソ 6:1~3) 親の訓戒に従うことができる子どもは、相当な人格と器をそろえるようになって、親の小言教育をよく消化できるならば、社会生活の強固な土台を置くようになります。家庭で親が尊く思えば、社会の中で人生の先輩や師匠、教会の重職者を尊く見るようになります。**三つ目**、家庭と家系に相続されてくる霊的問題と呪いを解決するのが最高の親孝行です。いくらおいしい食べ物、良い服、良い家に暮らしていても、両親が霊的な問題に捕えられて地獄に行ったら、それは不孝なのです。それで、両親に正しい福音を説明して見せて伝えるのが親孝行の中の親孝行です。

もう一度の機会 私にも名節が待ちどおしい理由は、美しい思い出があるためです。名節になれば、親はもちろん、いつもおじ、おばを訪ねて、いろいろな対話をしながら夜を明かししたりしました。あるとき、対話している途中で寝てしまった義父が夜 12 時を過ぎてから起きてきて、私に、お前がいつも話していた福音を言ってくれといったのです。そして、その日の夜、義父と義母は神様の子どもになりました。今は父と義父も、みな天国に行ったのですが、この世を離れる前、私に聞かせてくれたその方たちの最後の告白がまだ耳に聞こえてくるようです。

「ありがとう。天国でまた会おう…」

この永遠な幸せを、今年の名節に、この世の家族であるみなさんと分かちあえればと思います。

そのはじまりは次のとおりです。

聖書によれば、本来の人間は、神様とともにいる霊的な存在として創造され、すべての万物を治めて征服する祝福された存在として創造されました。

ところが、人間はサタンの悪賢い策略にだまされて、神様に不順従になったため、神様を離れる罪を犯すようになったのです。このときから、人間の運命はサタンに左右されて、呪いと苦痛の中に陥るようになりました。それで、いつも平安がなくて世の流れ、迷信、占い、偶像に依存するようになったのです。まことの満足がなく、不安と不眠症、うつ病、不平不満など、あらゆる精神問題に捕われます。葛藤と悩みの中で、肉体の病氣と悪夢、くり返す失敗に苦しめられるようになって、人生はますます虚しくなります。

結局、人間は子どもにも霊的遺産という家系の呪いを残したまま、永遠な地獄の火の審判台に立つようになるのです。

人間はこの問題を解決してみようとあらゆる努力をつくしてみのですが、解決することができません。

それで、神様は聖書に約束されたとおり、イエス・キリストを送ってください、人間の代わりに十字架で血を流して死に、復活してくださいました。サタンの権威と、私たちの罪の問題を解決して、神様に会う道を開いてくださったのです。

だれでもイエス・キリストを信じて心に受け入れれば神様の子どもになります。罪と死の原理から解放され、サタンの権威と運命から抜け出して、神様とともにいる人生を生きようになります。

今、あなたの運命と家系の運命までも変えることができる

奥義があります。

それは、イエス・キリストを自分の心に主人として受け入れることです。

そして、イエス・キリストの名前を呼んでみてください。

知らない間に、あなたと家庭と家系を困らせたサタンの勢力、悪霊の勢力は縛られて離れるようになります。

すべての万物は分けるほど小さくなりますが、分けるほど豊かになるのが福音がもたらす祝福です。



「主イエスを信じなさい。

そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」使徒 16:31

先祖供養に対する 正しい理解

供養の由来 亡くなった先祖を慕って、記憶して記念することは、非常に良いことであり、望ましいことです。しかし、死んだ先祖が霊になって法事の日に合わせて来て、食事をして行くのが先祖であるという発想は、科学的でも、宗教的でも、順理的でもありません。それでも、人々は名節（韓国固有の盆・正月）になれば、知識の有無と貧富格差を問わず、先祖供養の形式とくびきに自動的に縛られています。名節になれば、お供えをもらおうと先祖が黒い袋を両手に持ってドアをあけておく家ごとをのぞき込むと、あるシャーマンが自慢げに話したのですが、事実はシャーマン自身もだまされているのです。『先祖供養と現代文化』という本にはアフリカとインドネシア、古代中国で先祖供養を行ったと記録しています。中国の宋という国のときに、儒教学者の朱熹が、先祖供養を理論的に後押しして、韓国では三国時代とき、特別な王にだけ供養を行いました。この供養は高麗を経て朝鮮にまで、多様な形態の供養文化として発展するようになったのですが、特に先祖供養を行うのは、韓国で作ったことではなく中国から入ってきたのです。周公という人が家を遠く離れて学問に励んでいた中で、ある日、突然父親が亡くなったという知らせを聞くようになりました。とても遠いところだったので、行くことができず、親孝行を一度も正しくできなかったことを後悔しながら、食膳をそろえて故郷に向かってお辞儀をするようになりました。それを見て、弟子らがまね始めたのですが、一気に中国全域に広がるようになりました。それが韓国に入ってくるようになったのです。このような供養文化がごりやく的な信仰に変質して、供養をしなければ罰を受けるかと恐れる文化になってしまいました。

聖書はなぜ供養することを禁じるのでしょうか 中国の供養は、すべての家族と自分の家系の伝統を大切に自慢して過ごすというのに、私たちは供養するとき、先祖の霊がくると考えています。はたして、供養は先祖の霊にすることでしょうか。それが事実ならば、聖書で供養に反対するのは、先祖に大きな失敗をすることです。しかし、聖書はこの点をはっきりと明らかにしています。「いや、彼らのささげる物は、神ではなくて悪霊にささげられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。」(Ⅰコリント 10:20) 親が死んだ後、先祖の霊になって子孫に祝福と呪いを与えられるならば、子どもたちが供養を少し誤ったからといって呪いを下すことはないでしょう。それでも、供養を正しくしなかった理由で家に不祥事が近づく場合が多いのはなぜでしょうか。それは、まさに悪霊が訪ねてくるためです。悪霊はどうかして人間をだまして、滅ぼそうとしています。供養を行うときに訪ねてくるのは、先祖の霊ではなく、神様に敵対するサタンの手下である悪霊です。彼らが先祖であるふりをしながら人間をだますのです。偶像崇拜は家に呪いをもたらし、代々ほろびるようにすると警告されています。(出 20:4~5) それで供養を禁じるのです。

神様の子どもになる

受け入れの祈り

愛の父なる神様。私は罪人です。今まで神様を離れ、サタンの支配の下に縛られて、奴隷のように生きて来ました。しかし、今、この時間、イエス様を私の救い主、私の神様、私のキリストとして受け入れます。イエス・キリストは、神様に会う唯一の道であり、サタンの権威を打ち砕かれ、すべての罪とのろいと災いから私を解放してくださったキリストであると信じます。いま、私の中に入れて来てくださり、私の主人になってください。今から私の生涯を細かく導いてください。イエス・キリストのお名前によってお祈りします。アーメン

神様の子どもの

毎日の祈り

父なる神様、イエス・キリストによって神様がいつも私とともにおられて、導かれることを感謝します。今日も、すべての生活の中で、神様の子どもになった祝福を味わうように、聖霊で満たしてください。私の家庭と現場と行くところごとに福音を邪魔して困らせるすべてのサタンの勢力を権威あるイエス・キリストの御名で縛ってください。どんなこと、どんな問題でも、解決者であるイエス・キリストに任せて、その中で神様のより良い計画を発見しながら、聖霊に導かれる生活になりますように。そして、私の生活を通してイエス様がキリストであるということがあかしされ私の現場に神の国が臨むようにしてください。毎日、私の生活の中で神様の願いである世界福音化の契約を握って勝利できますように。今も私とともにおられるイエス・キリストのお名前によってお祈りします。アーメン



しあわせな家庭の はじまり—ことば

「ひとことで千年の借りを返す」ということわざや「行くことばがきれいでも、帰って来ることばがきれい」「行く棒、来る牛の尻の肉」という言い回しがあります。このような言い回しは、私たちの先祖が人生の中で体験して得た知恵を次世代に伝達したことです。しかし、人々はこのような先祖のことばに耳をそばだてて聞かないで、むやみに話をして、人々との関係をめちゃくちゃにしたり、幸せでなければならない家庭に不和をもたらしたりします。

創造主である神様のかたちに造られた人間は、ことばを通してお互いの心と考えを分かちあいながら生きていく社会的存在です。それで、人はだれとも対話できない状況を最も恐れます。それとは反対に、どんな難しい環境でも、自分の難しい状況を聞いて理解することができる人に会えば勝ち抜くことができます。それでは、このように心と考えを分かちあえる対象をどこで見つけなければならないのでしょうか。そこは、まさに家庭ではないでしょうか。

家庭で家族に最も必要なことは、お金ではなくて、対話です。家族間で心をやりとりする対話、愛を確認して分かちあう対話、深い関心を現わす対話、重荷をともに分かちあう対話が必要です。なぜなら、人は対話をせずには相手を理解できず、愛とは対話という手段を通すだけで表現されて伝えられ、人はだれかと対話がなければ孤独でさびしい感情が生まれるからです。

それにもかかわらず、家庭で家族どうし対話がうまくできない理由は为什么呢。

「雄弁は銀で、沈黙は金だ」ということばを聞いて

て育ったためであり、「君子は心の状態を表わさない」と習ってきたためであり、「相手に対する細心な配慮や関心を見せてあげることは偏狭だ」という文化の中に住んでいるためです。また、普段に、対話の訓練を受けることができないためでもあります。

そして対話には等級があるのですが、水準が低い5級対話から、とても水準が高い1級対話があります。例をあげるなら「こんにちは」「お元気ですか」「ああ、疲れた!」「天気がとても暑いね!」というように、相手を考慮しないで意味もなく習慣的に言うことばは、水準が低い5級対話です。「うれしそうだけれど」「疲れているように見えるよ!」等とともに自分の意見を表現しないで客観的な情報や知識だけを単純ニュースのように話す対話は、4級対話です。3級対話は客観的な事実と自らの考えを追加して意見を交わす対話として相手を見ながら「うれしそうだけれど、何か良いことがあったの?」「あなたヘアスタイルが変わったから、はるかに若くて美しいと見える!」ニュース解説と同じ対話です。2級対話は、自分の考えとともに感情、感じ、好きなこと、嫌いなこと、喜びと悲しみ、失敗と成功、夢と同じ人生の全分野を分かちあう対話として「あなたはうれしそうに見えるから、私もうれしいな!何か良いことがあったのでしょうか」こういう対話で、とても水準が高い1級対話は、率直に人格的な深い対話で相手と自分を分かちあう真実の対話です。例をあげるなら「今日、美しくて素晴らしいあなたを見ると、あなたといっしょに旅行でも行けたら良いなと思う」という対話です。あなたの家庭で、家族どうしの対話の水準を付けられたら、何級水準でしょうか。

*相談したい方はこちらまでどうぞ